

生徒のヤル気を育てる手帳システムの実践

矢橋佳之 北海道札幌白陵高等学校 教諭

1 本校のマニフェスト【平成25年度学校案内より】

学校案内の記載は、生徒・保護者に対する本校のマニフェストである。生徒を集めるためだけに良いことを語るのでは、学校の信頼を損なうだけである。語った以上、これらのことは確実に実施しなければならないことである。

(1) Face to Face な単位制

単位制では、いろいろな選択科目があり、自分に合った科目を選択することにより、学習を深めることができます。

その一方で、中学校より選択科目が多くなるため、授業で顔を合わせる先生方の数も多くなるので、一人ひとりの先生方と生徒の皆さんとの関係が希薄になりがちです。本校は生徒と教員の顔と名前が一致する4学級の学校規模を活かし、生徒のみなさん一人ひとりの小さな変化も見逃さず、しっかりと確実に成長させる全日制普通科単位制高等学校です。

(2) ^{イージオーダー} E O 型学びのシステム

本校では、それぞれの得意・不得意や興味・関心にあった科目選択ができます。「学びのペースに合わせた3モード学習※(国数英3教科)」と「多様な進路希望に応える選択科目」で生徒のみなさん一人ひとりの力を伸ばすところまで伸ばすシステムを導入しています。

(3) ヤル気を後押しする目標達成システム

どんな素晴らしい授業も、ヤル気がなければ効果を上げることはできません。

本校の特長の2つ目は、学習のシステムをより効果的に動かすために、ヤル気を後押しする目標達成システムを導入していることです。

社会で生きていくために重要な「姿勢を整え、心を磨く指導」と「学習を支えるキャリア教育」で君たちのヤル気エンジンに火をつけます。

2 本校単位制の基本デザイン

本校は、平成23年度の単位制移行以前から「学び直し」ができる学校ということで、アピールをしてきた。しかし、全員に1年間学び直しをさせることで、セールスポイントになるはずだった“学び直しができる学校”は“学び直ししかできない学校”になっていた。

結果、「浮きこぼれ」が発生し、本校を早期退学していった生徒のなかには、比較的学力が高かったものの、本校の学習システムに問題を感じて去った者も少なくなかった。

本校の柱の一つである3モード学習の導入には、学び直しが必要な生徒にはしっかりと学び直しをやらせ、高校の授業についてこられるようにすることと同時に、力のある生徒については、彼らの教育ニーズに応え、より成長できるようにするという目的があった。習熟度別授業ではなく、完全に選択授業として履修させているのは、その成長の学びの速度の差に寄り添った教育課程を明確に制度化するためのものである。

※ 3モード学習

本校では、英語・数学・国語の3教科については、生徒をアドバンスト、スタンダード、ベーシックの3つのモードに分け、年間4単位をクォーター(3か月)ごと1単位ずつと考え、年度の途中からであっても次の学びにステップアップできる教育課程を定めている。

3 本校が抱えている課題

(1) 教員の学力向上に対する意識の醸成

本校では生徒の学力をいかに向上させるのかについて、構造的な議論をする場面が少なかったことは否定できない。

教員に単位制以前の「白陵高校」を引きずっている部分が否定できず、かつての本校生徒との比較で満足したり、かつてと同じ指導をくり返したりといった状況がみられる。

せっかく入学してくる生徒層が若干ながら向上しているにもかかわらず、3年間かけてかつてと同程度の「白陵生」を社会に送り出しているようでは、社会の信頼は得られない。

(2) 学力向上のための戦略の立案

学校案内では「一人ひとりの力を伸ばるところまで伸ばす」と高らかに宣言している。しかし、3モード学習を導入したらすぐに生徒の力が伸びると言うほど簡単なものではない。どのような制度であれ、長所もあれば、短所もある。最終的にはその制度をよりよくするために教師がどれだけ汗を流せるかがその制度の成否のカギを握っている。

学校全体として、どうやって生徒のヤル気を高め、彼らの学びを充実させるかといった戦略が必要である。

① 基本的な生活習慣を整える

数年前に100マス計算ブームが起こった。おそらくほとんどの小学校で100マス計算をやらせていたはずだが、今はどうだろう。これは100マス計算という方法の精度が低いということではなく、これを有名にした陰山英男氏がやった実践の部品しか導入しないからこそ、こういうことが起こるのである。そもそも陰山氏は「早寝・早起き・朝ごはん」といった基本的な生活習慣を整えることから始めている。朝食をとって、脳がはたらく体をつくった上だからこそ、100マス計算などの実践が生きてくるのである。学校で成果を上げていない実践によく見られることだが、他校で成果を上げた実践の枝葉末節を導入することで学校改善を図ろうとするケースが少なくない。本質や根本の問題を見つめることなく、実践ごとに向いている方向がばらばらな学校では児童・生徒を混乱させるだけである。

学力向上のための土台は基本的な生活習慣を整えるところから始めなければならない。

② 生徒の学ぶ力を育てる

生徒に勉強しろ！と言って勉強するのであれば、こんなに楽な話はない。勉強の仕方も知らず、やれる自信もない生徒が相手であるという前提で、本校での学びをスタートさせてやらなければならない。ノートをとるということについても、そもそもノートを書く習慣もないまま高校に進学してくる生徒もいたり、その目的も理解せず、提出を求める教員のために書くものと勘違いしている者もいたりする。「そんなの常識だ」と切り捨ててしまうことは簡単だが、常識を常識として理解する機会を失ってここまで来てしまった高校生もいるのであれば、それを教えてやることも我々の責務である。勉強の仕方からこと細かに教え、少しずつやらせ、それをもらさず評価することで、やれる自信を育てることで生徒の学ぶ力を育てる必要がある。

③ 教師の意識を高める

教師側に「生徒は宿題をやってこない」という意識がみられる。しかし、それは生徒の問題ではない。要求する教師の指導の問題である。やるよう指示を出したのであれば、やりきるところまで指導するのが教師の責務である。やらなくても許されるから、生徒はやらなくなるのである。これは教師の指導に対する信頼にもつながる。「あの先生の指示は従わなくても大丈夫」など、指導が軽んじられるようなことは絶対に避けなければならない。

生徒に宿題も出さずに、家庭学習習慣の定着は望めない。生徒に必ず宿題をやらせ、家庭学習をさせるんだという教師の強い意志が必要である。

4 本校のキャリア教育の哲学

キャリア教育は進路指導と同一のものではない。キャリア教育は在り方生き方に関する指導であり、働くことに矮小化すべきものではない。まして、大学入試で必要となる科目を調べ、それだけを3年間で勉強すればよいなどと“損得でしか行動しない人間”を養成するのであれば、キャリア教育は害毒以外の何ものでもない。

近年、東京ディズニー・ランドのキャストの接客の秘密だとか、感動する話などが出版され、人気を集めている。残念なことだがファストフードのマニュアルでの接客ではここまでの人気にはならない。東京ディズニー・ランドのキャストの場合、お客さまにこうしなさいというマニュアルが素晴らしいのではなく、「すべてはゲストのHappinessのために」という一貫した哲学が根底にあるからこそその感動である。

キャリア教育は「なぜ働くのか」「なぜ生きるのか」といった哲学を生徒に考えさせるための教育である。生徒の進路実現をはかるのが進路指導だとすれば、その一歩手前の進路実現に必要な能力を生徒に身につけさせることがキャリア教育である。

本校では、そのような観点から文部科学省が提唱している「基礎的・汎用的能力」の育成を図ることを主眼にキャリア教育を進めている。

5 「ヤル気を後押しする目標達成システム」としてのキャリア教育

本校ではキャリア・ガイダンス（卒業時まで3単位履修）、キャリア・サポート（卒業時まで2単位履修）という2科目でキャリア教育を実施している。

キャリア・ガイダンスでは「人はなぜ働くのか」を深める「私の働いてみたいステキな会社」プレゼン大会や、本校の位置する白石区にちなんだ焼きそばメニューを開発する「白ー1グランプリ」などのプロジェクト学習を通じて、おもに「基礎的・汎用的能力」でいうところの「キャリアプランニング能力」と「課題対応能力」の育成を図っている。

一方、キャリア・サポートでは構成的グループエンカウンターなどの予防開発的心理技法を用いて「人間関係形成能力」を育成するとともに、パーソナル・ポートフォリオ、手帳システムによる指導を通じて「自己理解・自己管理能力」の育成を図っている。

特にパーソナル・ポートフォリオの作成、手帳システムによる指導は、コーチング技法でいうところの「GROWモデル」(Goal【ゴール】、Reality【現状】、Resource【資源】、Options【手段】)の4つを明らかにすることで、Will【意思】をもたせるとする考え)を実現するための方策として用いている。

ともすると生徒は「これをやったらどうなる」などといった近視眼的な損得で学習からさえも逃亡を図ろうとする。こんな勉強をしてどうなる？掃除なんかやっただけじゃないでしょ？なんて感じに。しかし、自動車用品販売のイエローハット創業者 鍵山秀三郎氏が「掃除道」を提唱しているように、一見どうでもよさそうなことに心をこめて行うことの方が、調査書にかける生徒会役員や学級役員（名ばかりだとするとなおのこと）よりも貴いことだってある。

心がこもっていない進路指導をやるような学校では、面接で「長所は？」と聞かれたら「明るい性格ですと応えなさい」というような指導がなされている。人事担当者によると、高校生ばかりではなく、大学生まで面接に来る人間の8割はそのように答えるのだという。これでは自分の良さをアピールできるはずもない。そもそも、高校生が18年間の生涯でどのような成長をし、どのような価値観をもっているかは人によって違う。それはこれまでに経験したことも、それをどう受け止めたかも違うからである。本校では自分の長所を自分の言葉で自分の経験をもって自信をもって語れる人間を育てる（4つの“自”＝4Gプロジェクト）ために、学校生活でどのような経験をし、それをもとに何をどのように考えたかをファイリングするパーソナル・ポートフォリオの作成を進めている。

6 手帳システムの導入

本校では昨年度から、生徒に望ましい基本的な生活習慣と家庭学習習慣の定着を図るために、手帳をもたせることとした。

導入してすぐ一斉に校内に定着したわけではなかった。しかし、昨年度ずっと担任が指導してくれたクラスでは、成果が表れている。以下は特に大きな変化が見られた生徒へのインタビューである。(年次はすべて昨年度のもの)

(1) 1年次生 M. Kさん

【基礎力診断テスト】

	国語素点	数学素点	英語素点	3教科 校内順位	国英 校内順位	数英 校内順位
4 月	67	74	39	43	84	37



1 月	77	71	45	12	35	8
-----	----	----	----	----	----	---

- ・ 手帳を活用することによって、計画的に勉強を進められた。
- ・ 翌日の時間割を毎日書いておいたので、忘れ物がなくなった。
- ・ テストの記録も書くことができるので、前回のテストからの変動がわかって、より上を目指そうと思えた。
- ・ いつ何があって何をしたのかがわかるので、後日見返せばどんな努力をしたかが思い出せる。
- ・ 今週の目標があることによって、今日はこれがんばるぞ！とかやる気が出る。
- ・ 大きな目標は大変だけど、小さな目標の積み重ねで大きな目標に近づける。
- ・ できなかった point を改善 point に書くことで、また直そうと努力できた。

(2) 2年次生 T. Kくん

- ・ 時間管理がうまくできるようになった。
「時間がない」と言っていたが、意外と使える時間が見つかった。前は帰ってからゴロゴロしていた。
- ・ 家での勉強は宿題をやるだけだったが、30分くらいは増えた。
- ・ 担任から「1日の行動を記録してみたら？」とアドバイスをもらうまでは、時間軸は書けていなかった。
生活リズムがわかるし、勉強時間がとれるので良かった。
- ・ 最初は何を書いているのか分からなかった。
起床時間、就寝時間、行事(カレンダーに)がスタート。目標欄は担任とのコミュニケーションが増えるかなと思い、書いた。提出物の期限等を書くようになり、提出物の遅れがなくなった。時間軸だけだと、どうするか分からなかった。
- ・ 1週間の目標を立てる習慣が付き、意識して行動できるようになった。
- ・ 毎日の一言コメント欄が重要だった。まとめて1週間を振り返ることで「がんばったな」と達成感が味わえたし、だらけていたら、「来週がんばらなきゃ」と思えた。

(3) 2年次生 S. Sさん

【定期考査素点】

	国語スタンダード	数学スタンダード	英語スタンダード	生物	日本史
前期中間	66	36	47	49	51



学年末	80	84	35	62	68
-----	----	----	----	----	----

【学年で10位以内】

- ・ 手帳に本格的に取り組んだのは冬休み明けから。担任から書いてみない？と言われた。1日が終わってからその日に何をしたかを書いた。
- ・ 今まで勉強していなかった（テスト前だけ）が、中学校の振り返りをやることになり（担任からの指導）、毎日ちょっとずつ（15～20分・時間ではなく課題の量で）やるようになった。
- ・ 後期中間の数学でスタンダード・モードの1番がとれたので、維持したかったことと、将来やりたいことが決まっていけないので、やりたいことができたときに困らないようにするために評定を上げておこうと思ったことが勉強をがんばれた理由。
- ・ その日にやったことを振り返ることで、何もしない時間がムダだと思えて、うまく使えるようになった。
- ・ 週の目標欄はとりあえず書いた。書いた時は意識していたが、1週間を通じては意識できていない。でも、「やること」に書いたことでやらなきゃと思えたこともあった。
- ・ 先生からのコメントが大事だった。コメントがないと、自分だけという感じがしてさみしかったと思う。たとえ一言でも無いよりはいい。

7 今後の手帳システム

その他にも、睡眠時間を確保できるようになって些細なことでキレなくなったなど本人も周囲も感じられる変化が出ている生徒は少なくなかった。

今年度は、年度初めにこれらのデータを校内研修で教員に提示した。生徒に変化を及ぼすことができることに納得をいただいたせいか、教員の意識が変容した。

以下は今年度、本校での手帳システムの定着のために始めたことである。

(1) 毎朝、SHRで机に出させる。(使う場面を増やす。)

生徒に朝の連絡事項をメモさせる習慣を定着させるために行っている。これをしっかりと行っているクラスは、そうでないクラスに比べ、遅刻の数も少ない傾向がみられる。

教科担任には課題の提出期限等を手帳にメモさせるよう指示をお願いしている。

(2) 毎週月曜日に担任に提出させる(担任・副担任によるフィードバック)

毎週提出させ、それを担任・副担任が点検し、最低限押印をする。できれば一言コメントを入れていただくようお願いをした。習慣として定着させるための重要なポイントである。時間がかかるため、嫌がる教員もいるが、定着しつつある。

書いてある内容が充実しているわけではないが、入学直後からその流れが当たり前だと思っている1年次生はほぼ全員提出しているクラスが多い。

(3) 手帳コンテストの実施

各生徒から特にながめられた1週間の手帳の中身(写真で)と手帳を使用することで得られた気づき、変化などを記載したエントリーシートを提出させ、優秀な手帳を表彰することとした。手帳活用の見本例を生徒の実践から発掘することで、生徒たちが活用するためのアイデアを豊かにすることを目的としている。また、それと同時に毎週欠かさずに提出した生徒についても、「手帳皆勤賞」として表彰する。手帳を提出することを習慣づけるためである。

今年度をもって本校に手帳システムが本格的に定着しそうな感触を得ている。昨年度、どうなるかわからない手帳システムであったが、信じてともに実践してくれた仲間のおかげで生徒に変容をもたらせることができた。とかく新しいシステムを導入すると抵抗が少なくないが、どんなシステムであれ、そこに血を通わせることができるのは、われわれ教員一人ひとりの力量にかかっている。本校の手帳システムが生徒の学ぶ力の向上に寄与し、大きな成果につながることを期待していきたい。